

ポルトガルの石材産地について

吉田 元¹⁾

大理石の世界三大産地のひとつ

ポルトガルは、イタリア、ギリシャと並ぶ大理石の三大産地のひとつです。首都リスボンの街では、大理石のピンコロ（舗石）を全面的に敷きつめた石畳の道をいたる所で見つけることができます。

また、歩道は3～5cmのやはり大理石のキューブを使って、モザイク模様飾られています。絵はがきや観光案内で見かけるあの異国情緒たっぷりの白い町並みは、こうした大理石で演出されているわけです。実際に現地を訪れますと、石の文化の街、大理石の産出国であることが強く印象づけられます。

ポルトガルの大理石採掘の歴史は古く、紀元前200～300年頃に始まったといわれています。リスボンの北西約40kmのマセイラという所には、すでに掘り尽くされて廃坑となった丁場（採掘場）跡がたくさん残っており、そこでは現在でも大小合わせますと400社近くの大理石工場が稼働しています。この地区が昔は大理石の一大産地であったことは間違いなく、この辺りが大理石採掘の発祥の地ではないかと想像されます。

ここで生産される製品は、主としてヨーロッパ、アメリカに輸出されていますが、機械設備はイタリア、日本と比較した場合には見劣りがし、製品の仕上がりも今一歩と行ったところです。

現在採石している丁場は、リスボンの東約180kmのエストレモズ、モンテモール地区をはじめとし、国内に広く点在しており、丁場の数は全国でおおよそ480か所にものぼるといわれています。

これらの丁場では、ロッサオーロラ、エストレモズクリーム、リオズモンテールといった世界的にポピュラーな良質の大理石が産出され、これらの石種は日本にも継続して輸入されています。美しいピンク色のロッサオーロラなどは、どこかで一度は目にされたこともあると思います。

しかし、どの石種も丁場ごとに色や模様に変化があり、大量に、しかも色を揃えての出荷となりますと、か



第1図 ポルトガルの石材産地

なり困難な状況にあります。ちなみに1990年度の日本の輸入量は、大蔵省関税局の輸入通関統計によりますと、原石で1,413トン、荒板は925トンとなっています。

建材用の御影石

ポルトガルには12世紀から13世紀にかけてムーア人によって築かれた城や城壁跡がたくさん残っていますが、そこには御影石が大量に使用されています。しかしなか

1) インターロック株式会社：〒141 東京都品川区
上大崎2-13-45

キーワード：ポルトガル, 石材, 大理石, 御影石

には風化によって、荒目の砂糖のようにボロボロになって崩れているものもあります。これは花崗岩の耐用年数といえるものなのか、あるいはもともと表層の石を使用したために発生したものなのか、専門家のご意見をお聞きしたいところです。

建材用としてはピンク系の石がポピュラーですが、色のバラツキ、単価等の問題で、日本のマーケットではスペイン産のピンクポリーノに負けており、ほとんど輸入されていません。

日本で有名な石としては、岩石の分類上で花崗岩の範疇に入るかどうかはわかりませんが、リスボンの南東約290kmの地区から産出する、モンシクがあげられます。帝国ホテルに使用されたのが最初といわれていますが、落ち着いた茶系統の、柄あいに特長のある石で、中間色が好まれる最近の傾向にのって、たいへん人気の高い石種となっています。

建材用の御影石については他に特に目立ったものはなく、ポルトガルは、ブラジル、南アフリカ等からの建材用御影石の輸入国でもあります。

墓石用の白御影石

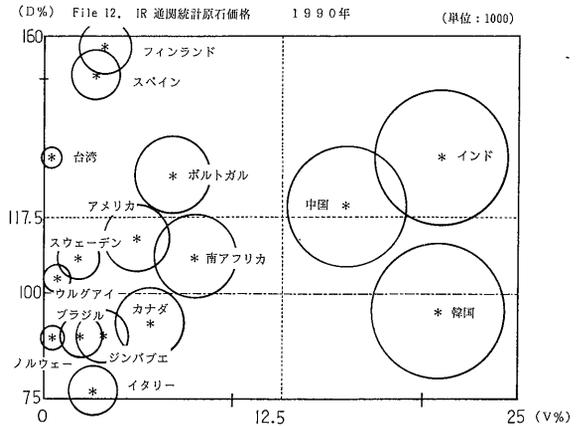
ヨーロッパの場合、墓石には主として大理石が使われます。また、最近ではマルチカラーと呼ばれる何色か混合した模様のある御影石が人気を博しています。建材用の御影石もピンクや赤といった色物か目の荒いものが好まれ、小目（粒子の小さいもの）で白御影石となると、せいぜい舗装に使われる程度です。

しかし、日本では白系統（石材業界ではグレーがかったものも「白」と呼びます）の御影石はもっともポピュラーな墓石材であり、ポルトガル産のものも17年前に初めて持ち込まれて以来、日本の墓石材としては欠かすことのできない存在となりました。

今、日本で使われている墓石材のなかで、トップの人気を誇るのが、SPI と呼ばれるポルトガル産の小目の白御影石です。日本人好みの色合いであることに加えて、墓石材の必須条件である吸水性の低さ、安定供給が可能といった点が、人気を博している原因です。

ポルトガルの白御影石はどの石も吸水性が低く、日本での需要特性にもっとも合致した石ということができ、SPI の他にも中目の白御影石が産出していますが、いずれも日本では高い人気を誇っています。

輸入通関統計を見ましても、SPI 導入期の1974年度には1,640トンであった輸入量が1990年度には63,084トンと大幅に増加しており、ポルトガル産白御影石の人気を裏付けています。



第2図 1990年の国別の石材輸入量。輸入通関統計による。縦軸は対前年比の成長率、横軸と円の直径は容積。

第2図をご覧くださいとよくわかりますが、この図は輸入通関統計の金額ベースの推移を表したものです。縦軸に対前年比の成長率、横軸と円の直径にボリュームをとって比較分析したものです。

御影石に関しては、現在日本での輸入状況は、インド、韓国、中国、そして南アフリカからのものが大半を占めており、ここ数年來この傾向は変わっていません。しかし、これを見ますと、ポルトガルはボリュームでは前出の4大国に次いでおり、成長率に至っては中国、韓国、南アフリカを抜いています。

白御影石の丁場

大理石に比べて、白御影石の産出する地域は非常に限定されます。リスボンから北東へ約230km入ったポルトアレグレ（写真1）というところからSPIが、また、そこから少し内部に入ったサンタエウラリア地区から中目を



写真1 リスボン北東約230kmのポルトアレグレ付近の白御影石採掘場。



写真2

ポルトアレグレ付近の白御影採掘場。人肌のような所がジェットフレームによる、櫛状部分がクォリーバーによる切断跡。

の白御影石が産出します。

ポルトアレグレの丁場は面積で100m四方、深さ20～30mと、大理石や建材用の御影石の丁場と比較すると規模も大きく、白御影石の丁場としては世界的にも有数の丁場といえます。

採石方法は、ジェットフレームによって岩盤から切り離し、クォリーバーと呼ばれるドリルで穴をあけ(写真2)、黒色火薬を使って掘り出します。大きな丁場でも従業員は30人くらいで、採石に必要な機械類はすべて揃っており、機械化はかなり進んでいます。

最初に述べましたように、ポルトガルは大理石の産地として世界的に有名ですが、日本との密接な結びつき

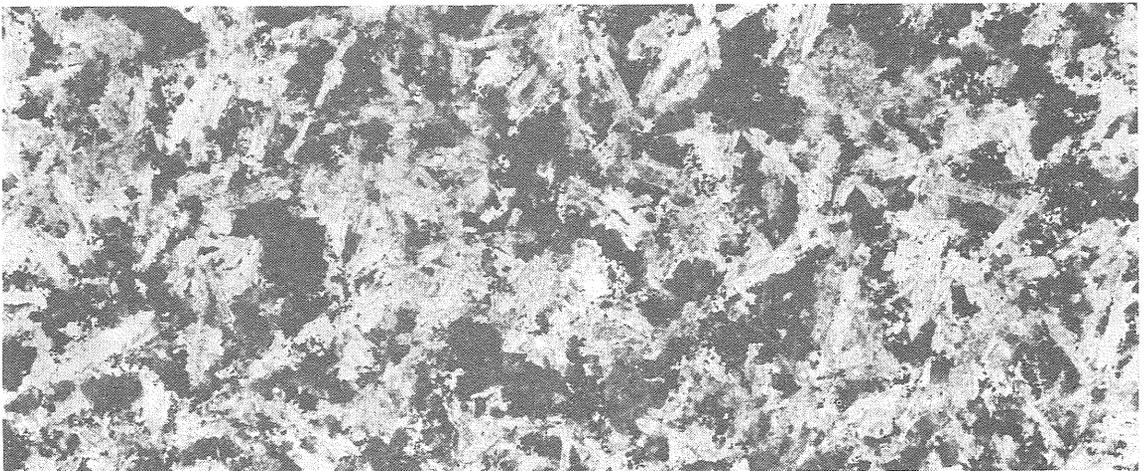
は、実は大理石ではなく、白御影石にあるわけです。

数百年前、日本に西洋諸国の窓口としてさまざまな文化をもたらしてくれた国、ポルトガル。

そして現代、ポルトガル産の石材が日本の建築用に使用され、また石碑や墓石として日本人の心のよりどころになっているのを見ると、今度は「文化素材」使節がやってきているような気がして、なんとなく楽しくなっています。

YOSHIDA Gen (1991) : Granite and marble quarries in Portugal.

<受付：1991年3月22日>



特徴あるポルトガル産みかげ：モンシック。墓石材として輸入される一般の白みかげがヘルシニア期(約3億年前)の貫入岩であるのに対し、これは大西洋の拡大に関連したアルカリ岩。針状斜長石が正長石に浮んでみえる(等倍)。